氏名（本籍）	大石貴之　（　静岡県　）
学位の種類	博　士（　理学　）
学位記番号	博　甲　第6684号
学位授与年月日	平成25年7月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	生命環境科学研究科
学位論文題目	A Geographical Study on the Supply Structure of Crude Tea in Japan （日本における荒茶供給構造に関する地理学的研究）

主査	筑波大学教授	理学博士	山下清海
副査	筑波大学教授	Ph.D.	呉羽正昭
副査	筑波大学教授	博士（理学）	松井圭介
副査	筑波大学教授	理学博士	村山祐司
副査	筑波大学講師	博士（理学）	森本健弘

論　文　の　要　旨

日本における農産物流通は、1970 年代ごろまで、農協共販を中心とした大量生産・大量流通が主流であった。ところが、1990 年代ごろから安価な輸入農産物が農産物市場に導入され、さらに 1990 年代からは消費者の志向が多様化して安全・安心を追求する農産物が求められるようになった。その結果、生産地では直売所における農産物販売や個別宅配など多様な農産物の販売方法が模索されるようになるなど、従来の農産物の流通形態が変化するようになった。農業地理学における研究においても、主として生産部門を研究対象としていたものから、流通部門や消費部門を研究対象とするものが増加し、生産部門の内部構造に加えて流通部門や消費部門といった外部構造から生産部門を再検討しようとする研究により多くの関心が集まっている。しかし、従来の多くの研究は流通業者側からの分析が多く、農産物流通に対応する農業地域の性格を分析する研究の蓄積は不十分である。また、フードシステムの概念が地理学に導入されてから、生産から消費に至るまでの流通構造は把握されつつあるものの、生産者と加工業者あるいは加工業者と流通業者など、農産物流通における部門間の連関をどのように捉えるかがフードシステム研究における課題となっている。

そこで本研究は、緑茶を対象に、日本の代表的な緑茶産地である静岡県と鹿児島県の産地を取り上げ、原料となる荒茶を生産する荒茶工場とそれを購入する茶商との取引関係について、荒茶工場の経営形態から分析することで日本における荒茶供給構造を明らかにすることを目的とした。

まず、生産者である荒茶工場の経営形態を、個人であるか共同であるかという組織形態と、荒茶の原料となる生葉の調達形態によって、個人自園工場、個人買葉工場、組合法人工場、株式会社工場の４形態に分類した。その上で、各経営形態における①荒茶の供給範囲と供給量、②茶商との取引方法、③荒茶加工における茶商の関与度という３点から、荒茶工場と茶商との取引関係を考察した。そして、静岡県と鹿児島県の分析結果を統合して、日本における荒茶供給構造について解明を試みた。

日本における緑茶生産は、明治時代の緑茶輸出をきっかけとしてその規模を拡大し、特に、主要な緑

茶輸出港に近接していた静岡県は、緑茶需要が国内に転換してからも日本における荒茶生産量の約４割を占めるなど、日本における緑茶生産の中心地である。その一方で、鹿児島県では、1950 年代から政府主導で紅茶生産が進められたが、1970 年代の紅茶供給量の低迷によって緑茶生産が拡大し、静岡県に次ぐ緑茶産地となった。

静岡県は日本における古くからの茶産地であり、対象地域とした東萩間地区では個人自園工場や個人買葉工場に分類される個人工場が多く立地しており、これらの工場や会社法人工場では茶商と荒茶工場が密接に結びつくことで荒茶工場が茶商の下請けのような関係を構築していた。一方で組合法人工場は複数の茶商に対して荒茶を供給し、斡旋業者や茶農協を介した取引関係を構築し、特定の茶商に対する依存度は低いことが明らかとなった。

鹿児島県は比較的新しい茶産地であり、対象地域とした知覧町では、組合法人工場や会社法人工場に分類される荒茶工場が多く立地しており、茶商とは茶市場を介した荒茶取引を行っており、特定の茶商への依存度は低い。一方で、北部山間地に立地する個人自園工場は高級茶を生産しており、茶商側も知覧町で生産される高級茶であることを前提として、直接取引によって荒茶を仕入れている。

以上の考察の結果、次のような点を明らかにした。1）日本における荒茶の供給構造は、静岡県内の茶商を頂点とした階層構造として理解することができること、静岡県においては茶商を頂点として、その下に斡旋業者や農協など多様な仲介業者が存在し、多様な経営形態からなる荒茶工場を束ねる複雑な構造が形成されている。2）一方、鹿児島県においては、静岡県の茶商の下に鹿児島県内の茶商が存在し、さらにその下に茶市場が存在して大規模な荒茶工場を束ねるという比較的単純な構造が形成されている。3）近年、静岡県では荒茶生産の大規模化が進み、農協共販や茶市場を利用した荒茶供給へと展開している一方で、鹿児島県では荒茶生産の高品質化が進み茶商との直接取引へと展開している。

審　査　の　要　旨

農産物流通に関する地理学的研究について、フードシステムの概念が地理学に導入されて以降、農産物の生産から加工、流通、消費に至るまでの流通構造に関する研究に多くの関心が払われるようになってきた。しかし、農産物の生産者と加工業者、加工業者と流通業者など、農産物流通における部門間にはどのような連関が存在するのか、またそこにはどのようなメカニズムが存在するのかについては、まだ十分明らかにされていない。

本研究は、農産物流通における売り手と買い手の取引関係を、精力的なフィールドワークに基づいて、売り手側である荒茶工場から分析し解明した点で高く評価できる。現代の農産物流通においては、消費者の動向を見据えた生産者の行動を把握することが重要になっており、この点において農業地理学の研究の発展に寄与する貴重な研究であり、博士論文として十分な価値があることが認められる。

平成25年5月30日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。